

学習英文法シンポジウムを終えて

—講演内容のまとめ—

最初にお話し下さったのは江利川春雄先生です。江利川先生は「学習英文法の歴史的意義と今日的課題」という題で、(1)学習英文法の歴史、(2)学習英文法の指導法、(3)学習英文法と学習指導要領の関係の3点についてお話をくださいました。

1点目では、学習英文法の歴史は150年にも及ぶものです。幕末から英語と格闘し続けてきた先人たちが、英語母語話者向けに作られた文法書を、日本人英語学習者(以下、学習者)向けに作り変えたものが「学習英文法」であり、英語と日本語の差から生み出される学習の困難さを軽減するために開発した素晴らしい遺産であると述べられました。

2点目では、学習英文法の「指導法」は常に進化し続けているため絶対的な指導法はないと主張されました。例えば、田地野先生の「意味順」、大津先生の「ことばへの気づき」を利用した指導など様々なものが考案されています。

3点目では、文法指導に時間をかけるよりもコミュニケーション活動を行うことを重視する学習指導要領の影響で受け、英語学力が低下している(Cf. 齊田, 2010)ことに言及されました。そして、この英語学力の低下を食い止めるためには、日本人にふさわしい英語学習法を再考する必要がある、そのカギを握るのが学習英文法であるとまとめられた。

次にお話し下さったのは、斎藤兆史先生です。斎藤先生は、「足場としての学習英文法」という題で、(1)学習英文法の役割、(2)具体的な学習英文法の指導法についてお話をくださいました。

1点目については、学習英文法は学習者にとっては「足場(ここでは足場掛けの意)」であり、足場掛けである以上いずれそれを取り外すにしても、最初は足場を意識的に組み、使うことで、英語の基本構造が理解し易くなると述べられました。また、英語が使えないのは文法を意識しすぎるからであるということを決してなく、その文法が気にならなくなるまで、つまり、英語が体に染み込んでいると言えるほど練習をしていないからであるからであると主張されました。

2点目については、放送大学で斎藤先生ご自身が担当されていた講座の様子をビデオで紹介くださり、明示的指導・訳読指導・音声指導との連携を図りながら、状況に応じて指導法を使い分け学習英文法を教えることの大切さをお話しくくださいました。

そして最後に、教師は学習者の得手不得手に合わせ、臨機応変に指導のあり方を調整すること、必要に応じて学習者に文法のきちんとした説明ができること、またそのための準備(文法書に目を通すなど)をしておくことが必要であると、英語教師の側についても言及されました。

次にお話し下さったのは鳥飼玖美子先生(立教大学)です。鳥飼先生は「コミュニケーション能力と文法——二者択一からの脱却を目指して」という演題でお話しくださいました。

鳥飼先生の話は、巷でよく語られる「文法かコミュニケーションか」という誤った認識に対して向けられたもので、結論から言えば、文法（学習）は外国語コミュニケーション能力の育成に必要なものであり、理論的にも支持されるということです。

鳥飼先生は Canale & Swain (1980) に言及され、Communicative Competence（コミュニケーション能力）という概念においては、grammatical competence（文法能力）はその重要な構成要素であるということを私たちに改めて認識させて下さいました。このことを考えると文法かコミュニケーションかという問い自体が無意味であることが分かります。

この話題と併せて鳥飼先生は、外国語教育実践において Approach（「アプローチ」）と Method（「指導法」）の概念が明確に理解されていないのではないかとご指摘をされました。現代では上述の Communicative Competence を基盤とし、Communicative Approach という考え方が主流となっていますが、それはあくまで「アプローチ」であり、そこから具体的な「指導法」が色々と導き出されます。「指導法」が色々考えられることは独創性が発揮されるというメリットもありますが、時には「指導法」ばかりに目が向いてしまい、その背後にあったアプローチ、つまり、基盤となる考え方を忘れがちになったり、もしくは曲解してしまうというデメリットもあります。そうすると、自分では Communicative Approach をとっているつもりでも、文法説明は避けられるべきものであると信じるという、ねじれた状況が生まれてしまいます。そのようなねじれを鳥飼先生は、これでは理論的に破たんしてしまった「Audiolingualism と区別できない」と述べられました。Communicative Approach では文法説明は回避されるべきものではないということは上述の話をふまえれば明らかでしょう。

このように鳥飼先生のお話は、私たちがアプローチや指導法の違いを今一度、理解することの重要性、そしてそのことを踏まえ、より良い文法説明のあり方、また、その下地になる学習英文法について考えることが、いかに重要なことであるかを再認識させて下さいました。

次にお話し下さったのは、田地野彰先生です。田地野先生は、「学習者にとって『よりよい』文法とは何か？——「意味順」の提案」という題でお話し下さいました。田地野先生は、「学習英文法」を、まず大津・窪菌（2008）に基づき、「それ自身の厳密さよりも、学習者にとって使いやすく、わかりやすいことが重要である」文法であるという立場で、「意味順」という英語の基本構造を理解するための新たな枠組みの有益性について話されました。

「意味順」は、学習者に文の大まかな構造を把握させる助けになるもので、それは「だれが」→「する（です）」→「だれ・なに」→「どこ」→「いつ」（→「どのように（して）」「なぜ」）のように表されます。これを見てわかる通り、これは英語の文構造を、動詞型のように「形」による分類ではなく、また、5文型のように「（文法）関係」による分類でもなく、「意味」という視点を前面にだして分類したものとして注目すべきものです。これに

より、5文型の説明において学習者がつまづきやすい「目的語」や「補語」という文法「用語」を用いることなしに、それらの文法「概念」を教えることが可能になります。その意味で「使いやすく」「分かりやすい」と言えます。

特にその「分かりやすさ」については、田地野先生ご自身が小学生を対象にして行った実践を交えながら、大変説得力を持って説明されました。また、「意味順」の学習を通じ、今までは英作文に全く手をつけられなかった学習者たちが、間違えながらも何とか英作文を書く（英文を組み立てる）こと、言い換えれば、積極的に間違えることができるようになったとご報告されました。白紙解答では、そこから得られる情報がほぼ皆無であることを考えると、学習者が積極的に間違ってくれるという事実は、指導する側からすれば非常に有益なことです。

田地野先生のお話には、具体的な例やその成果が多く盛り込まれており、聞き手も具体的に新しい学習英文法とはどういうものであるかが実感できたように思います。今後「意味順」がこれまでの学習英文法の体系とどのように結びつき、その位置づけを明らかにしていくか、その進展に期待したいと思います。

次にお話し下さったのは、山岡大基先生です。山岡先生は「アルゴリズムとしての「学習英文法」という演題で、実際に中高生に英語を教えておられる立場からお話してくださいました。山岡先生は、「Stepwise Rewinding 法(英語版巻き戻しスモールステップ法)」という方法を用いて、英語のWH疑問文の作り方を効果的に教えることができるのではないかと主張されました。スモールステップ法は、学習者がすでに習っている文法項目を含む文に、一つずつ操作を加え、最終的なゴール(新しく習う文法項目を含む文)にたどりつかせるという指導法です。この方法では、新しい文法項目を含む文を作る手順が明確に示されており、機械的に文を作ることが可能なので、その意味できながら「アルゴリズム」や「マニュアル」のようです。機械的に手順を追えることができるということは、言い換えれば、個々のステップすべきことについて悩む必要はないということでもあり、それは特に英語が苦手な生徒たちにはとって有益であると思われまます。

2つ目の具体例は「かんべ式・新5文型」でしたが、これはかんべ氏が、高校レベルの英語の読みにおいて正確に構造を把握するための「アルゴリズム」として提案したものであり、主語の見つけ方など、詳細な手順が示されています（具体例はかんべ氏の著作や本シンポジウムのハンドブック 21 ページをご参照ください）。

これら 2 つの例を通じ、山岡先生が捉えようとした「アルゴリズム」は山岡先生ご自身の言葉を借りれば「フレームワークとその使い方」ですが、その「フレームワーク」に比べ、「その使い方」という部分はこれまで特に見過ごされてきたように感じます。その見過ごされてきた「使い方」の部分を分析的に明らかにすることが、学習者の英語学習を効率よく進めるためには必要なのではないのでしょうか。「かんべ式」の学習参考書の評価が高いのも、上述のような非分析的な部分が分析的に、そして明示的に示されていたからこそ、

学習者は「わかりやすい」と思ったのではないのでしょうか。山岡先生が指摘くださったこの「アルゴリズム」的側面は、学習英文法を考えていく上でも大変重要な側面だと思われます。

最後にお話し下さったのは、大津由紀雄先生です。大津先生は、「日本語への『気づき』を利用した学習英文法を考える」という演題で、(1)「ことばへの気づき」と英文法の関係、(2)認知科学の視点からみた「学習英文法」の姿についてお話下さいました。

まず、「中 1 秋の壁現象」という現象を紹介しながら、説明して下さいました。「中 1 秋の壁現象」というのは、夏休みに入るまでは丸暗記でなんとかついていけた英語の授業が、夏休みが明けて、文法の理解を求められるようになり、途端にわからなくなる という現象のことです。例えば、3 単現の“s”が分からないなどです。こういった英語の文法事項がわからない原因は、英語の仕組みを理解するための基盤が学習者の心に育成されていないことにあると述べられました。したがって、英語の仕組みである英文法を理解するためには、小学校段階で、学習者の直観がきく母語を利用し「ことばへの気づき」を養うことが必要であると主張されました。このことは、かねてから大津先生が主張されている「ことばへの気づき」を基盤とした言語教育の必要性と密接に関連しています(なお、大津先生の構想される言語教育については、大津編(2009)『はじめて学ぶ言語学』第 17 章をご参照ください)。

次に、学習英文法は「深追い厳禁」とのキーワードでお話し下さいました。学習英文法は、その時々学習者にとって効率よく学習が進むものであれば、その一貫性は局所的なものでよいとのことでした。理由は 2 つあります。(1)言語学者の明らかにしようとしている英文法とは質的に違うということ (2)学習者は、教師によって教えられていないことも、自分の心の働きによって補う力を持っていること、つまり、教師が学習英文法を教え、学習者の持つその潜在的な能力を発揮させれば、外的な支援がなくとも自分の心の働きで補うことができるということです。以上の 2 点から、学習英文法は「深追い」してはいけないと述べられました。そして、大津先生は、学習者に英語をすべて教えることはできないが(英文法は現在、研究途中であり、誰も全貌はわからないため)、その学習の支援をすることはできる、それが学習英文法の役割であるとまとめられました。

指定討論者である久保野雅史先生、松井孝志先生、討論参加型司会者である柳瀬陽介先生が講演内容を受け、登壇者に対してのご質問、そしてご自身のご意見をくださった討論の内容を簡単にご紹介いたします。

久保野先生は、自身の教壇経験を踏まえ、(1)教室は学習者にとって鍛錬の場、どのように練習させる? (2)分かりやすく、力がつく指導とは?と登壇者に疑問を投げかけられ、現役で高校生に英語を教えていらっしゃる松井先生は、(1)学習英文法の全体像とはどのようなもの? (2)「フィーリング」、「イメージ」などを用いた指導法は危険? などのポイント

トをあげられました。柳瀬先生は、登壇者の学習英文法の歴史的、理論的分析を受け、学習英文法の再構築の必要性、そして討論者からの指摘をふまえ、神経科学的視点から見た「フィーリング」「イメージ」の文法指導との関わりについて述べられました。松井先生、柳瀬先生の指摘されたポイントは天津研ホームページに掲載してある資料をご覧ください。

全体討論に入る前には、『英文法総覧』を執筆された安井稔先生からコメントを頂きました。安井先生は、学習者の心を存分に生かした指導をする必要があると述べられました。教師は学習者に英語のすべてを教えることはできないが、学習者は英語のすべてを学ぶことはできる、そして教師は、学習者が英語を学ぶ手助けをする役目があるのだ ということ。「トマトを育てることはできない、トマトは育つことはできる、トマトが育つのを助けることはできる」とトマトをにとりお話し下さいました。また、コミュニケーション力は TOEIC のスコアで表せるや、勉強したのに英語ができないのは学校英語教育が悪いからである という世の中に蔓延る誤解についても言及下さいました。

参考文献

Canale, M and M. Swain(1980) “Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing” *Applied Linguistics, 1* pp.1-47

天津由紀雄編(2009)「ことばと教育の関連をさぐる」『はじめて学ぶ言語学』 pp.307 - 326
ミネルヴァ書房

天津由紀雄・窪菌晴夫(2008)『ことばの力を育む』慶應義塾大学出版会

斉田智里(2010)「項目応答理論を用いた事後的等化法による英語学力の経年変化に関する研究」(未刊行博士論文、名古屋大学)

(天津研究室大学院生 藤田麻友美)

学習英文法シンポジウムを振り返って

— 「学習英文法」という概念 —

今回の学習英文法シンポジウムでは、9 人のスピーカーに多様な視点から「学習英文法」について語っていただきましたが、今振り返ってみて、気になっている点を 1 点だけ指摘したいと思います。

それは今回のシンポジウムにおいては、「学習英文法」そのものについて語られることが少なかったのではないかという点です。シンポジウム当日は「学習英文法」の歴史、「学習英文法」を教える教師の役割、「学習英文法」の指導法、「学習英文法」と関係する外国語コミュニケーション能力の理論的基盤などについてのご講演があり、それぞれが興味深いお話だったことは間違いありません。しかし、「X の分析」や「X の指導」と言った場合の、その X に当たる「学習英文法」が何であるかは十分に明確だったでしょうか（これをふまえ、本文においては「学習英文法」はすべて括弧つきで表現することにします）。この疑問は、より具体的な問い方にすれば、例えば江利川先生のご発表において、学習英文法の金字塔として紹介された齋藤秀三郎著 *Practical English Grammar* のどの辺りがどういう点で「学習英文法」と呼べる特徴を持っていると言えるのか、またその判断基準はどのようなものであるかということであり、例えば山岡先生のご発表において、WH 疑問文の指導方法が提案されましたが、その WH 疑問文という項目自体は学習英文法という概念とどう関わっているのか、また、「学習英文法」に特化した議論の場で提案される新しい指導法は、通常の研究会などで提案される指導法と比べて異なる特徴を持っているか、といった問いです。私にはお話を聞きながらこれらのような疑問が湧いてきたのですが、（おそらく発表時間の都合上により）それらについての明確な答えを得ることはできませんでした。この点で、田地野先生のご発表の中で、「学習英文法」を考える際の基準として「わかりやすさ」と「使いやすさ」に言及され、その基準に照らして、「意味順」がいかに「学習英文法」として有用であるかを語っておられていたのは説得的である印象を受けました（もちろん、ここにおいても「わかりやすさ」と「使いやすさ」が学習英文法としての基準として妥当かどうか吟味する余地は残されていますが）。

上に挙げた問いはどれも「学習英文法とは何か」（例えばそれは英語で *pedagogical grammar* と呼ばれるものと同じ概念なのか、また日本語の「学校文法」とは区別される概念なのか）、「学習英文法を考える（研究する）ということはどういうことか」（例えばこの研究領域には具体的な「指導法」を考えることも入るのか）という問いと深く関わっています。このように「学習英文法」という概念を吟味する視点は、シンポジウムでは大津先生の「きょうの主題は学校英語教育において必要な学習英文法“なにを（内容）”“どうやって（方法）”教えるのが適切か？です。」という問題設定に部分的にも表れていますが、シンポジウム全体で見た場合には、そのことが十分に意識され、議論されていたとは必ずしも言えなかったように思います（少なくとも私はそのように感じました）。

もちろん、「学習英文法」を考えていく際に、極端な懐疑主義に陥り、その定義づけばかりに固執しても仕方ありませんので、個々人が具体的な研究を進めながら、同時にその境界を徐々に画定していけば良いと思いますが、もし、そもそも「学習英文法」という概念についてあまり吟味がなされておらず、私たちの間でも共通の理解がそれほど得られていないという状況であれば、まずは「学習英文法」という概念自体を分析することは必須の作業でしょう。また、シンポジウムという場において、大勢の参加者が集まり、ある共通のテーマについて議論する際には、議論の核となる用語についてはある程度の定義づけをし、その意味を明確にしておくことは、議論（及び議論間）の構造が明確になり、聴き手の理解も促進されるという点で有益です（当然、この作業によって他の登壇者から、そしてフロアから反論が出ることもあると思いますが、それこそ議論の醍醐味でしょう）。

最後に、上の指摘は今回のシンポジウムの価値を否定するものでは全くないということを述べておきます。それは、今回のシンポジウムの目的の 1 つは「学習英文法」という考察すべき対象を議論の俎上に載せること、つまり、「学習英文法」が重要な研究対象であることを私たちが再認識することであったからです。そして、この目的が達成されたことは、シンポジウム会場が満員になるほどの参加者を得られたこと、また、シンポジウム終了後、様々なブログや HP にて反響を呼んでいることから明らかです。これらの動きが大きいうねりとなり、一人でも多くの方が日本の英語教育において「学習英文法」を研究することの重要性を認識し、その研究が活発になることを願いつつ、私自身も一大学院生として、その流れに貢献できるよう努力していきたいと思います。

(大津研究室大学院生 永井 敦)